

セッション名：医療3

医療満足度の国際比較

- 日、米、英、独、仏の個票データを用いた実証分析 -

塚原 康博	明治大学
藤澤 弘美子	明治大学
福原 浩行	医薬産業政策研究所
笹林 幹生	医薬産業政策研究所
岩井 高士	医薬産業政策研究所

かつての医師・患者関係は、医師が患者に対する医療の内容を決定し、患者がその決定に従うというものであった。しかし、医療の目的は患者の健康を改善し、患者の満足度を高めることにあるため、医療サービスを受け取る患者自身を中心に据える必要がある。それゆえ、現在の医師・患者関係も医療本来の目的に立ち帰って、患者中心の視点が求められているのである。患者中心の視点から医療のパフォーマンスを評価するとき、その指標の1つとして取り上げられるのが患者からみた医療満足度である。日本製薬工業協会・医薬産業政策研究所（高橋由人所長）は、医療満足度に関する研究プロジェクトを立ち上げ、その成果を山内・真野・塚原・藤澤・野林・藤原(2005)としてまとめた。この研究は、日本の医療消費者を対象とした分析であった。そこで、今回は、研究の対象範囲を日本以外の主要先進国、すなわちアメリカ、イギリス、ドイツ、フランスにも広げ、医療満足度に関する国際比較プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトは、企画の段階で、医薬産業政策研究所前研究員の野林晴彦と藤原尚也、医薬産業政策研究所研究員の福原浩行、明治大学の塚原康博と藤澤弘美子が参加し、実施の段階で、野林と藤原が医薬産業政策研究所研究員の笹林幹生と岩井高士に交代した。したがって、研究成果はこれらのメンバーの共同の成果である。

本研究から得られた主な結論を分析ごとにまとめると以下ようになる。

(1) 個別の医療項目に関する満足度の平均値の分析

第1に、各国内での個別の医療項目の満足度の相対的な位置は類似している。これは国によって医療制度の違いはあるが、医師などの医療提供者が医療サービスを供給し、患者がそれを受け取るという医療行為は国によって大きな差はないためであると考えられる。第2に、日本の満足度がほぼ一貫して低く、アメリカの満足度がほぼ一貫して高いという傾向が見られる。これについては、悲観的な回答をしやすい国民性や楽観的な回答をしやすい国民性の違いなどを反映している可能性がある。

(2) 生活全般の満足度で補正した個別の医療項目の満足度の平均値の分析

第1に、生活全般の満足度で補正すると、各国間での個別の医療項目の満足度の値が近い値に収束する傾向がある。したがって、国民性などを補正すると、医療に対する満足度の評価は各国間で類似しているといえる。第2に、補正した14個の医療項目の満足度について5か国間で差の検定を行ったところ、12項目で差がみられた。12項目中8項目でアメリカの満足度が一番高く、7項目でドイツの満足度が一番低かった。ただし、補正した医療全般の満足度の順位は高い順に、ドイツ、イギリス、アメリカ、日本、フランスであった。公平性の満足度で日本が一番高かった。

(3) 個別の医療項目の満足度が医療全般の満足度へ与える効果の分析

第1に、4か国共通に有意な変数は、「医師の治療技術」、「治療時の患者自身の意思尊重」、「医師との対話」であった。これらの変数は、ほぼ各国共通に医療全般の満足度に影響を与える変数である。

第2に、経済的な変数の「診療時の自己負担額」が日本においてのみ有意であった。これは日本の自己負担額が他の国より高いことが影響した可能性が考えられる。経済的な変数が有意なのは日本だけであるが、現行の制度を前提とする限り、過度な自己負担の引き上げは医療全般の満足度を引き下げると考えられる。また、日本では、「医療の公平性」の有意性も高いため、医療全般の満足度を維持するためには、公平な医療を堅持することが重要であろう。

* 本研究で示される考えや意見は、日本製薬工業協会や医薬産業政策研究所の公式見解ではない。